

飛騨安政五百歌

秋之部

月	初月	后月	文月	初秋	銀河	于蘭盆	匠火	魂杉	暮急
名月	三日月	十三夜	葉月	今朝の秋	貸少神	さつこい	匠鐘	杉狸	生才魂
月見	待宵	星舟把	九月月	七夕	かきき	高灯籠	送火	蓮飯	盆子有
名月雨	十六夜	竜田姫	立秋	星今宵	願の糸	灯籠	魂祭	廿二船	踊



下目ノ一

新酒	露時雨	沙魚	宿築	紫山子	駒色	後彼岸	田刈	野分	露	秋風	西瓜
溜酒	漸室	外の市	初鮭	引板	放生會	初汐	晩稻	早稻	さり	牙小入	花火
長夜	朝き	彩世	朝	落	活仕宮	ハ朝	新米	落穂	二百十	置扇	殊暑
秋の夜	夜き	砧	落鮎	隈鮎	鳴子	駒川	穂家祭	本孫取	稲妻	初嵐	角力

秋の香	柿	秋紅葉	一葉	木槿	菘袴	菘葉	地元の花	ふく庵	花野	野葉	蓼花
秋の海	ふとう	秋の霧	教柳	菖の糸	まんのけ	秋海棠	稲の花	蓮の葉	桔梗	鬼灯	芦花
秋の水	梨子	秋の雨	草花	我木香	荻萱	萩	唐辛子	蘭	芭	風仙花	菊
秋の山	茗苳		女郎花	嵐尾林	萩	萩	系瓜	芭蕉	紫苑	鶉頭	尾花

未枯	鳥瓜	葛	梅しんき
めつこ	芋	同引菜	栗 芥
木犀	木 忍 実	圓 栗	榎の 実
葦	松 葦	葦 竹	栗
濃柿	葉 堀	紅葉	ササ 紅葉
むし	蛭 刺 虫	秋の 蟬	秋の 蟬
秋の 名	秋の 雁	秋の 蚊	養 蚕
蜻蛉	きりぎりす	はとどり	いし
蜻蛉	きりぎりす	鶯	渡 鳥
鷹	木 啄	鶯 鷓	乙子 帰
椋 鳥	木 啄	鷹 山 別	鳩 吹
鳴	木 啄		

麻 笛	麻	河 麻	蛇 宿 入
行 秋	冬 隣	秋 夕	九月 暮
秋 朗 詠			

冬之部

初 雪	雪	吹 雪	志 守 子
初 晴 雨	時 雨	み 替 礼	雪 の 雨
あらし	霜 柱	霜	冬 の 雨
氷 柱			
十 月	小 春	霜 降	師 走
冬 至	初 暁	初 暁	初 暁
夷 儀	子 祭	吹 葦 祭	初 暁
里 社 祭	十 日	遠 摩 忌	遠 摩 忌

芭蕉忌	法取哉	法佛名	鉢たき
空念佛	大師講	冬木立	木枯
落葉	木子葉	陽花	枇杷花
枯柳	菖子葉	冬梅	冬玉梅
山茶忌	ハツ子	冬梅	枯尾花
冬椿	冬牡丹	冬梅	枯芦
茶の忌	冬茶	石路	冬の川
冬枯	草枯	冬の山	干菜
枯野	大根引	冬の山	
葱	麦時	冬鳥	
鷓鴣	子鳥	冬鳥	鴨
冬鳥	冬鳥	浮藤鳥	冬の繩

鷹	たの粘	ぬくめ鳥	お鳥引
鯨突	綱代	紫漬	生海氣
のき	河豚	あんまり	くら鱈
空	菜管	冬菴	ふとん
衾	紙子	頭中	足巾
巨燵	埋火	火桶	火鉢
たんぼ	紐不し	冬拵	炉箆
口切	玄猪	事始	穀並
袴着	凍	氷	雪車
納豆	楯	炭竈	すそ女
炭竈	冬月	冬月	冬の入
空の内	空の内	空の冬	冬の日

下目四

冬 詠	大 晦	丘 見	追 澁	衣 配	心 、	冬 の 夜
	榮 華	春 侍	年 支 推	昔 今	昔 今	冬 の 田
	年 肉 三 冬	年 取	年 忘	や く 拂	冬 の 拂	瑞 ハ
	除 夜	年 薨	以 年	年 の 市	解 橋	鞍

附録

石見山句 善光寺句

俳諧安政五百頌 秋之部

俳諧居墨寺輯

月

知るる能く冬山を以て見く月池
 聖日の事しあるぬもう終り月
 との山を雪ふもうとく一々の月
 おの事なく宵を是ゆ月夜
 目出たしと月もたあすう々
 心を放て若古年以れ月夜人
 世をまをうらとといふありまの月
 名もく事もおまひるるもよめと月

卓池
 悠々
 梅家
 大梅
 素庵
 双鳥
 由緒

はこ人の明なりあやを月を門
影を志を月を志を月を志を月
よはつりと船を法を志を月を志
おの承うあふかと言一月の言
る雪をりおろち曉て月を志
立出さるのら終りあふの月
まを所アをところありか月の
うらの毛のくはもを月を志
月を志や二もところと此を志
さり終らるる方もあるてをの月
ふもいふところを月の志を月
夕月や志を志を志を下る山

悠平 富年 万三五 茂楽 妻秀 祖郷 杜庵 左二 梶塵 目外 宗古

相うややは志を月を志を月を志
月を志を志を志を志を志を志
深志のくはもを志を月を志
おのあけつ口の志を志を月を志
せしめつらおあつてさる志を月
おあふを志を志を志を志を志
津よゆら志を志を志を志を志
月を志を志を志を志を志を志
しらを志を志を志を志を志を志

名月

名月や志を志を志を志を志
名月や志を志を志を志を志

可大 史玉 逸淵 海年 木本 菅丸 清水 柳輝 蒼乳 梅室 叢

袖の隅あそび

名月ふ田あおむこしするその法
名月のうきふ入るけしひと
名月やこころとそなたを藤麻の軒
名月の雪よも法もぬ光こう那
名月やえ法さぬひよふ木のこま
名月やあそびる光をむささるる
名月や言歌のあはれおぼえくら
名月や岸しむあそびるをその枕
名月やぬりまけしそえとらそ
名月や布こひひの浦をそえ
名月をさるるの隅あそびうな

風鈴 芳頼 松竹 可常 釋無 平山 名毒 巴休 貞之 波同 田京

名月やそあふのこころあう 名月
名月やそあふ心の法うぬ 青

狭山のそら

名月や麓のそらあひきく
名月やひさし仕替へて遠の家
名月や尾へ降りて暮しやらそ
名月やり「燃るんゆるそらあそ

月見

雪ころろ度ふおのころ月見のれ
心ころころるるそらめり月見が
向ありくそそ月見こう那
舟待のまころそらめり月見のれ

柳圃 好静 柳祥 山外 一具 蒼帆 卓池 沙路 栲山 雪堂

はらみ出ずらくもそぬ月見が
心のまきうらめしく月見のま
月を捻くくまのたの月見が
一具外

名月百

月影るふくや宵森のふと心
松の影を光くす面の月
只ふくすおまははみふるの月
降出しくそのうらまき雨の月
常よりし本う市明くるるの月
何委やらふよのま出果てるの月
暗あまきすくふ入くく雨の月
桐雨
松竹
心南
瓦翠
越外
桂山
蒼帆

初月

初月や萩少多秋とそ極ぬ弁
終り見く空うはまきり初月花
初月やおろをそらうりそ門別
初月の入くくくくそ極のま委ぬ
古くうやと船おまきそ初月花
友翠

こり月

見あまきそや松木のまきふこりの月
こり月や門先掃く人を居す
こり月ふ極みまきそむ白ひれ
こり月や七ツまきそそあまき
こり月やまきそそおむるま上
極先みまきそそハぬ初月こりの月
卓池
一宵
江平
極通
一具
蒼帆

待音

待音を月をささけの月待つ那
待音やとせしをささけの月
心はくはる音やとせしを待
待音中心ささけの月待り
待音や風待中ささけの月
待音やとせしをささけの月

梅室
竜昇
待甚
雲崇
可厚
山海
俣禪

十六番

晴きはくく於縁の月待り那
十六音よとせしをささけの月
十六音やとせしをささけの月

卓池
琴丸
卓郎

十六音やとせしをささけの月
かきとせしをささけの月
十六音やとせしをささけの月
十六音やとせしをささけの月

大梅
合吉用
多よ
一具
山外

後録

見とせしをささけの月待り那
映於山とせしをささけの月

影明

耳とせしをささけの月待り那
重とせしをささけの月待り那
落とせしをささけの月待り那

卓池
春路
一京
美山

いそいでいそいで隣にわたりや後み月
おろし月を遠く見られては月
晴きつて若さをけりや後み月
いとを舞うく廣く母あやしの月
朝晴し一すの空をり後み月
千歳し一とを舞うくうすや后の月
木のおらわてまねをんとす後み月

十三夜

十三夜を寐るも侍候のある物
月ののみははるやうな十三夜
出掛くは終て連ふけはね十三夜
名跡ともいふ十三夜

星月夜

あら清く星をとうとうと介し月夜
連保を連しふ人形かし月夜

竜田娘

明星を光るとおとけり今り竜田娘
見よとさく世経しと妹を龍田娘

文月

ふと月や味し一葉する京の月
ふと月やお入てうらめしき月
ふと月やお入てうらめしき月
ふと月やお入てうらめしき月
ふと月やお入てうらめしき月
ふと月やお入てうらめしき月

菅元

尾村

其山

柳園

中野

橋室

一具

應之

能保

磯岩

駄岳

畏三

懐子

島吟

梅玄

梅五

壽宇

呉城

松竹

ふくもや不二三つんふねと書田川
ふゆうう所もふさふ里うな

一具
中橋

葉月

秋ともる月も葉月記光の那
八月やふとく風ふのあさる
八月や籬のあう也山秋香

卓池
嵐外
き波

長月

七月の秋の初よりつこさなり
そふふるる秋香さく九月うぬ
七月や須磨てあうり吉野山

葉蕨
雲水
西月

初秋

初秋や桂香ふ花さくも松の色

松室

初秋のそまふまや雪一法
初秋や昭きとくわりしうぬわ
とら秋や峰はくりてハ雪こみちる
初秋や舟のとき終一海秋上

大巻
西三
然地
中橋

今秋の秋

隣うら門とくねるや秋の秋
秋こしふ葉の身やもさこの秋
桐のふに影よきもや秋の秋
ふふふのふれうこくともありと秋
ややふふふふふふふふふふ秋
出さ雪ハ山もとりてと秋秋秋
明系も備ふありくと秋の秋

卓池
塔年
多よ
抱像
塞馬
珍里
梅山

おもしろことほろろとせしむる秋
一止
こゝらひい、吐しおゑるると秋の秋
月外
森不立に赤色とてうてて秋の秋
梅室

立秋

秋立や月夜とふれとくも暮ら
若人
竹の心も秋立を花の那
小和
秋立や船霊糸おとと
婦牛
秋立やと秋のあらし
左良亮
秋立やと秋のあらし
梅室

七夕

七夕や秋の夕夕とてはあし
蒼乳
七夕や一とてはあし
山外

七夕やあしつとてはあし
南
七夕や扇をるはし
月
七夕や風小なはし
月外
七夕のほろり押し
壽
七夕やと扇をるはし
何丸
七夕やと扇をるはし
梅室

星々膏

只一粒星をたよふはし
卓池
尾の竹をたよふはし
柳
七星の列をたよふはし
静
宵小似ぬ光やふしの列をたよふはし
紫
明うをたよふはし
風をたよふはし
二ツ星
而

人皆の心をなやませし一星七音

銀河

横所をなやませし一星七音
松風の浪よまきさらし一星七音
濃うもききあふふちせの天竺川
蘇くさくさねも忘れなき天竺川
よく見えて只静なり一星七音
天の川よまきあふふちせの天竺川
くさくさねも忘れなき天竺川
その音のふもてさひしやその川
天の川をぬれなき天竺川
おまきさく人を道ふも天竺川

梅宮

蒼乳

一具

横山

雪頂

盛年

可常

三省

まは

快雅

為山

臥小起すりたる也ハリお天の川

情さくとねんそくも一星七音

天の川よまきあふふちせの天竺川

かー小神

かきくれも星のひらりやう小神
雪井よまきあふふちせの天竺川
夕暮やまきあふふちせの天竺川

驚の橋

このをくさのそ一也あや隙とよみま
かきくれも星のひらりやう小神
夕暮やまきあふふちせの天竺川

預結糸

やうつたたもつまねをふりたる

伽禅

中提

梅宮

茶袴

一具

西三

畏三

西月

双鳥

星ふ糸以侍ましおさなるとはうひび

于茶茶益

梅家

名目用とて燈の標所も掃とあり

卓池

うらむるやの燈つて色る浦のふ家

漸重

せはらこい

せはらこいふやとせれつてふふ佛ふ家

梅家

せらふふのやと茶ふふありたるとる見

雲市

高灯籠

教山もろふ宮もろふ一高灯籠

茶家

柿のふらとてふふありたるとる見

多上

高灯籠や表ふひつてふ一高灯籠

仙家

高灯籠やとてふふありたるとる見

木家

かろりたるやとてふふありたるとる見

梅家

灯籠

灯籠やとてふふありたるとる見

茶家

灯籠よ歩りたるとる見

西家

仲の町ふら

自とあり灯籠ふらうの生

淨家

人とあり灯籠ふらうの生

茶家

灯籠の作り場をくるとる見

月外

灯籠や一る燈一一人通り

舟家

村も風もふらねとてふふありたるとる見

佛家

灯籠の名所をてらとる見

具

一おろく町も灯籠ふら

中家

送火

むらゑの火を焚き捨てあり、唐紙門
を介して人下りもさよふ先とまゝく
送火や、流風たぐ、人通り

御符

葛古

梅家

正續

夢園まづくもこゑさう也、正續
こゝろくもたふく後を、正續

畏三

淡物

送火

おろろもや附木ていらまゑの上
送火や志さうか多き人通り
おろろもや屋うて我牙もあめり

年沖

蓮宇

御符

禊祭

嵐雪を吹あき名よ魂中たり
うく風を色入さ、まや魂系
迷付おあもねより、石や魂系

確泉

多上

護物

魂系

たよるふの露川うある嵐系
魂系何の露系、さきも露
第本不意魂系灯のうりま

風形

万之五

山外

柳経

柳経や、かゝる、炭まき又了り
柳経おあもやらるゝあの方

涼花

風形

蓮わ

是より上よりあり蓮の飯

御符

たつふあらぬ道あり蓮の飯 確衣

廿二鬼歌

一才おあしく押出やきこの船 仇禪
舟のこころさあまはらぬあは 確衣

暮詠

まのつ詠松風をぬりこしてあやま 逸剛
暮詠こころさあまはらぬあは 多よ
まのつ系縁さきくまをうりなま 有言

生所魂

くこむらぬひさもうたれす生所魂 為山
まのつあはらぬあまはらぬあは 深起

盆歌月

あてまて空のまきよふ盆歌月	卓池
本名あはれ抄を戻りまを盆歌月	盛年
森やうとて掃このまを盆歌月	中振
廿日ころまを盆歌月	持久
時よのあきく心執らまを盆歌月	雪里
掃先やあきよふ盆歌月	木菴
ふみまここ盆歌月	兄森
霞おまハ人も盆歌月	一具
夕暮まのあはれ盆歌月	仰禪
てる中ふあま盆歌月	盧本
明風ま佛ま盆歌月	梅室
えらるるの盆歌月	美礼

踊

眺しこころあをさうりふあさおとらりか
たこころあをさうりふあさおとらりか
志らぬのやをさうりふあさおとらりか
仕舞舞まや、風呂あておと踊る
おふしよののよふあさおとらりか
よくらんれそ我ふありはまこをさうり
美ささつてあてとらりりの踊る
踊りや一息入るあさおとらりか
おとらりあをさうりふあさおとらりか
美ささつてあてとらりりの踊る
あさおとらりあをさうりふあさおとらりか

卓池
木葉
奇三
桂山
行砂
湛紫
藤山
成年
一こ
把像
基馬

悔の中く月のさーおれとらりく
あさおとらりあをさうりふあさおとらりか
軽の口血そかおとらりあをさうりか

一西瓜

寺入のよあさおとらりあをさうりか
こころあをさうりふあさおとらりか
風呂蒲の上うらたらく西瓜
ちさあさおとらりあをさうりか
持たましうて直をさうり西瓜
西瓜ささあさおとらりあをさうりか
花火
目ふけさあさおとらりあをさうりか

他縁
茶丸
山外
梅意
素屋
茶丸
丁知
他縁
中権
松竹

ちかふくもつるひまのあふ火のれ
 菘まふを雪ふきあふる心すこのふ
 目の休む竹のさくあふる心す
 言あふ人うかみゆふ心す
 是の言を忘れる火のれ
 湖の松のまきあふる心す
 木山やみれをうかみあふる心す
 後に船を遊ぶうかみあふる心す
 人をの目まきうかみあふる心す
 花をうかみあふる心す

跡 暑

昔古
 可大
 菘丸
 山
 作廣
 一朗
 荻村
 氷壺
 柳縁
 梅室
 美々

ちかふくもつるひまのあふ火のれ
 菘まふを雪ふきあふる心すこのふ
 目の休む竹のさくあふる心す
 言あふ人うかみゆふ心す
 是の言を忘れる火のれ
 湖の松のまきあふる心す
 木山やみれをうかみあふる心す
 後に船を遊ぶうかみあふる心す
 人をの目まきうかみあふる心す
 花をうかみあふる心す

角カ

おく川やとらそふある角カ取
 川廻ても川ぬくも過角カ
 橋よりくまてんら秋々を角カ取
 心とをハ母よりドして角カ取
 心とをハ母より起ふしや角カ取
 くらありと浮雲よりあり角カ取
 橋よりくまてんら秋々を角カ取

卓池
 野樂
 古武良
 一光
 心星
 景城
 風郎

秋風

夏の衣ふも秋風たちぬ山は寂
また一人の坂をあつるや秋の風
と味常のほろあつるや秋の風
たそひつるにほふ光あり秋の風
秋風よとやかく別るく山は寂
ふもささるる袂ふりぬる秋の風
秋風や穉よとぬる秋の風
ふもささるる人ふもささるる秋の風
ふもささるる其本とふくや秋の風
田畑の外を黄とむや秋の風
人のささるる其本とふくや秋の風

阜池
沙路
羅百
さ波
波文
波路
雁
桂山
峯
一具
中

身入

身入や其所のあつるの集り風
おささるるやふもささるる又板ひたし

扇金

ふもささるるふもささるる扇金
秋の風よとやかく別るく山は寂
ふもささるる其本とふくや秋の風

初嵐

海老あつるの針ささるる初嵐
ふもささるるふもささるる初嵐
ふもささるる其本とふくや秋の風
相畑や桑葉ささるる初嵐

以
碧山
以
以
以
以
以
以
以
以

むらゆめのうごましのみそ初嵐
初嵐のうごましのみそこころ

冥市 清言

霧

空霞やまきせと曇る降の軒
のまみる白帆んとあまをり
散るそなたの結ぶやまを霞
霞の軒や垂りうごましの
まをりよごまのまをりあま
夕暮ふまきせ入もり不二の結
ぶまをりあまはあて居れま
結ぶよふ結ぶよふあまの
まをりよごまのまをりあま

糸池 平山 松竹 素庵 里香 風谷 流甚 木本 大翠

ささゆくと初嵐もあやも
あまのまきせのまのま
あて居れまをりあまのま
あまのまをりあまのま

為山 さ波 梅意 中捨

雨霧

川ささりや粟喰こふす村ま
ささゆくと初嵐もあまのま
まきせのまをりあまのま
あまのまをりあまのま
あまのまをりあまのま
あまのまをりあまのま
あまのまをりあまのま

一具 左乙 嵐平 一京 其秋 升百 思言

糸のむすも軍あり 子平の平
川 子やを能知ありるりあうれ
子りたる多也ふんくともあふ新書
河 齋

二百十日

二百十日 若くそ星能ひうりうれ
く少ふありて忘時一二年十日、くそ
歩 齋

稲妻

稲妻や 磯河 さいり 稲妻大
稲妻 子 中 磯河 を 舟 の 舟 あり
稲妻 子 ね ありて 居る 釣 あり
稲妻 子 仕 ありて 帰る 時の 糸 屋
ゆきく 若く又 稲妻 の 舟 あり

稲妻や 舟 あり 稲妻 舟 あり
稲妻 や 舟 あり 稲妻 舟 あり
稲妻 や 舟 あり 稲妻 舟 あり
稲妻 や 舟 あり 稲妻 舟 あり
稲妻 や 舟 あり 稲妻 舟 あり
稲妻 や 舟 あり 稲妻 舟 あり
稲妻 や 舟 あり 稲妻 舟 あり
稲妻 や 舟 あり 稲妻 舟 あり
稲妻 や 舟 あり 稲妻 舟 あり

稲妻

稲妻の 舟 あり 稲妻 舟 あり
稲妻 の 舟 あり 稲妻 舟 あり
稲妻 の 舟 あり 稲妻 舟 あり
稲妻 の 舟 あり 稲妻 舟 あり
稲妻 の 舟 あり 稲妻 舟 あり
稲妻 の 舟 あり 稲妻 舟 あり
稲妻 の 舟 あり 稲妻 舟 あり
稲妻 の 舟 あり 稲妻 舟 あり
稲妻 の 舟 あり 稲妻 舟 あり

早稲

とまの香もあつてあつて麻は先
早稲はあつたりとあつたり
古里や宮連歩り 早稲はあつ
早稲の香や馬を替へて秋は酒
早稲はあつたりとあつたり

後穂

おまふ川、あつてあつて後穂はあつ
人ほまふ川の中もあつてあつ
とまの香もあつてあつてあつ

本穂

ほむはあつてあつてあつてあつ

秋の香りや少穂を山あの上

田新

又とせを稲新少田の早の香
お田新のたつとあつてあつ

晚稲

山まふ川、あつてあつてあつてあつ
日入るもあつてあつてあつ

新米

新米や新米のあつてあつてあつ
新米やあつてあつてあつ

後穂

ほむはあつてあつてあつてあつ

若人

山介

志後

梅宮

後物

草堂

卓池

素行

若人

山介

志後

梅宮

後物

草堂

卓池

素行

若人

山介

志後

梅宮

後物

草堂

卓池

素行

そよふりそよふり〜〜〜のうへに彼處

涼花

初夜

初〜と手杖出たを道も十歩ほど

汎翠

初夜や杖を〜〜〜の道

唯岩

八朝

八朝や漢の出来たる櫛をり

卓池

八朝や山家たる魚の礼色

御経

八朝や名あるあいたる菴の手

栴山

那〜と生るる〜〜〜の小牛

五反

駒引

駒曳や道も小毛も〜〜〜の心

中推

駒曳や道の心は〜〜〜の情

丈左

駒近

駒近は時山を新きるりの那

風齋

中〜と〜と〜と〜と〜と〜と

多吟

放生會

放生しと云ふは〜〜〜の心

中推

茶する人々〜と〜と〜と〜と

色淵

近付る角力ふと〜と〜と〜と

一具

清道宮

清道を〜と〜と〜と〜と〜と

風齋

さむ〜と〜と〜と〜と〜と

泊遠

鳴子

一川よさる〜と〜と〜と〜と

卓池

りろみよ終おとす 鳴子之那
 鳴子川入り月夜あつら社より
 風おふくくさるもや鳴子繩
 門まら子道をたしつと出た川
 藪の家ら向まつてくも東の鳴子
 梅室

素山子

風たそめつるまをころたしりし
 ちあら川への事お供くまじり家
 画より書きそりつたのまもつたけし
 夕暮らお高みか昇らおじりま
 暮らゆりくかじさひさ山ゆれ
 備中くつたおまじむいりりりりり
 志修
 木蔭
 伏禪

こゆき道てくらしつたあつたけし
 事おお田の明たあつたけしりりり
 田中物よまらひおあつたけしりりり
 一具
 号城

曳板

心をく月えつて人ふ曳板お音
 山方よりまじり 秋や川板の音
 川板の音てまあつたけしりりりりり
 中盤
 一具

小滝を流す山ゆれ水
 おまをくもや只一筋お音
 まらまら川とをまらりりりりり
 おとむるの周しつたお音水
 御経
 芥舎
 素山
 号城

片、之方、く口、新、を、さ、る、さ、り、落、し、を、
 人、天、か、う、不、用、と、あ、る、巾、着、し、を、
 さ、ひ、能

子、押、あ、る、ま、な、能、の、混、り、を、
 い、く、ふ、と、の、測、せ、と、さ、く、の、能、混、り

岸、葉

其、く、ふ、ふ、と、る、や、漸、落、の、家、や、不
 岸、是、と、る、葉、竹、其、や、少、お、家

初、能

水、少、紙、能、も、一、中、二、葉、の、那
 初、能、お、さ、さ、不、ひ、や、細、ふ、を、ぬ、じ
 と、ら、あ、ま、ふ、い、さ、く、の、能、お、じ、り、成

福、船

名、を、と、ら、た、ふ、と、ら、た、や、船、は、を
 船、物、も、お、樹、も、ぬ、や、さ、く、う、れ

岸、船

後、見、し、り、船、お、く、く、や、さ、か、落
 落、能、也、二、流、と、ら、う、く、と、む、川
 る、風、中、船、落、つ、と、ら、お、お、能、

沙、魚

と、世、約、の、傘、き、と、や、大、井、河
 沙、魚、釣、お、さ、く、柳、を、心、を、ひ、り
 と、や、釣、也、耳、ふ、し、い、ら、ぬ、里、お、能、
 河、魚、釣、や、さ、く、少、さ、の、さ、き、と、ひ

僕、民

一、具

卓、池

茶、山

梅、室

陸、雨

戸、古

み、也

中、控

一、具

畏、こ

梅、室

佛、祥

活、高

名、竹

丁、島

庄、海

外、島

井の弁

甲や畑おものありそりー井の弁
町中くおとく持とくー市おれ

一具
中持

新おは

新おとや小裏をうやておの宮
市へおとくちさうふふりねと舞とて
新おとや布子おれ旋おれま舞遠

對山
山添
一具

店

村口小入とろーんおきぬさうな
一ッ言おふひとつおえさぬ、の耶
清海屋おひらうふひくくお、のな
二人時おれま遠とくぬさうり梅らとら

葦丸
山外
呼牛
鳥津

そのおとふとろ人あうさ山おれ
屋入んおと帯おれおとや小おれ
まてとろおれとふおれおれおれ、のな
ま遠いのうおれおれおれ、のな
屋ととろおれおれ、のな
おととろおれおれおれ、のな

る山
月庵
竹雨
月か
西言
中持

利根川

おととろおれおれおれ、のな
おととろおれおれおれ、のな
おととろおれおれおれ、のな

何福
梅言

露時雨

おととろおれおれおれ、のな
おととろおれおれおれ、のな
おととろおれおれおれ、のな

乙良
石菜

にらり酒

とゆらうや外たうきき市ぶ小高
にらりてき花よぬ糸よ酒の味

長夜

さびしえふく秋のいづむも
待てし一曉成さぬ永う那
まねをえりのく人ぬお舞ふ
ゆふとゆふぬさる春ぬう那
月のあさるるもまねしきおぬ

ハ奈
野秋

秋をねの衣秋よちあし舞うる
秋のよたふぬぬいさうく白おぬ

舞
衣
白頂

秋をねおとえさふぬ屋ふひらり
秋のおやえぬ持よりふ高き色家

垣
西馬

秋の音

お寄るはあそとらす秋の音
少りる樹の音ぬみ舞く秋の音
我ぬをね人ぬさる秋の音
何んぬとあうくさぬさる秋の音
ゆふぬぬさしちちらさる秋の音
おぬさるぬおさるぬぬさる秋の音

阜池
喜山
枯山
墨
一
旭

うほむいそ旅人來たり秋の音
る秋て信門前所も秋の音

不
際

秋の海

暮らさるやうに終りも尽しぬ秋の海
竹のとまると家とをうしるふ秋の海
秀外
拙儀

秋の山

日こ入るも月こさすこ秋の水
湖と出で流れるや秋の山
卓池
蓬陽
意の折みきこあらまう秋の山
風節

秋の山

秋の山こるれく小暮るや
りよむいそつへおらるや秋の山
ハ奈
碧濤
かちるりお一筋さすや秋の山
雨竹
今こくたつおんこり秋の山
仙操

村

家ねくこつんく床や柿の歌
庭柿やん所々の所々
有月
清所柿や詠み古々の以る所
確衣
ふとら

梨子

りあつりへおをばさいきふら
年と能くみるぬ少もおふとら
小柯
一枕
ありとあるや秋の色ふじをか
梅雪
柳おあまのやあはれか
後雪

世帯

破うをたつ嵐をきうんまの畑
多し

丹情のむもつちめやうかこさこ
あ山

秋の夜

一日そわくもーささる秋の夜
若帆
照く

秋の夜

秋の夜おほくやさあおほくをこわす
まき
あき

秋の夜

あきさきさきり懶んや秋の夜
あ地
山

月代おらんささあや秋の夜
常磐
若年

あきさきさきり懶んや秋の夜
月之
あ左

一葉

方々あきさきさきさきさきさきさき
あ地
山
馬
揚
粉
寸
風
祥
通

水のみなしれを思ふなり 女郎を
所へ給ふよを能くしゆわし 女郎を
つらきわし 女郎を思ふなり
以てんてんも我く風情や 女郎を
原中や少ね一本なり 女郎を
あつたきなり 女郎を思ふなり

有命
桂城
石外
柳園
色程
梅室

出る口をききこし 女郎を思ふなり
おろちふらけかこし 女郎を思ふなり
栞むと 女郎を思ふなり
女郎を思ふなり
女郎を思ふなり

卓池
柳臺
西馬
栞山
依程

葛のみ糸

葛の笑や望むるを山より
糸のつらき雨を思ふなり

深所
石山

我木香

栞むかき 女郎を思ふなり
栞むかき 女郎を思ふなり
栞むかき 女郎を思ふなり
栞むかき 女郎を思ふなり

一具
惟草
白石
心星
陸原

嵐尾草

嵐尾草や夏を思ふなり
そらそらや 女郎を思ふなり

一具
二丘

芙蓉

旧脱ひきくすのあゝ芙蓉や
舟より花かたけくふきさきまのま
持あふはるみそちあふ芙蓉のみ

秋海棠

生垣ふりそよもりしきりし秋海棠
心ここのもりたる葉のぬちも秋海棠

萩

こぼろももあひふらふらふの葉
人よあまて定るもよのさめりうれ
風ぬもこふれてみくやるの萩萩
唐の萩もあふをせし王女おとふけ

るの萩萩人こももらくまふりし
掃除よももあふを萩萩も入らふ
ささりよよあひの萩のうれりうれ
ふ萩萩やふりハきらりももれま
こぼろももそのうは萩萩をふせり
枝こしふ青をこぼろの萩萩こころ

萩

暑のりそこ萩萩とくも萩のる
門もももももあふを萩のる
りあふももももももも萩のる
風中けもせあや萩萩萩萩
古萩やふもかかくて萩萩萩萩

深淵

舟中

舟中

中絶

多

舟池

梅園

可常

基馬

宇池

吳味

山外

梅家

其多

原池

市古

一條

船中

梅園

持てんぬか

り如きくけきまを定しそこの
かーこまを畑にまきわきまを
おまを畑にまきまをのれまを
まひーまをまきまをのれまを
おまをまきまをまきまを

福の女

少るーしてまらしまのぬか
思ふ人よみらぬかま福の女
まようまをまのまを福の女
おまをまをまのまを福の女
福の女をまを福の女

酒の女のま

苗一れの中おまをま福の女
福の女をまを福の女

唐の年子

是のまを福の少のまを福の女
まをまをまを福の女
まをまをまを福の女
まをまをまを福の女
まをまをまを福の女

系瓜

布衣よまを福のまを福の女

確良

可轉

可轉

可轉

可轉

可轉

可轉

可轉

可轉

可轉

風洞

系池

系池

系池

系池

系池

系池

系池

系池

系池

はるおれし〜も〜入る〜
起〜ふ尺取て〜
も〜を輝〜
り〜れて〜

瓢

接〜と命の〜
形り〜
まかるの〜
十の十〜

蓮

蓮〜
〜
〜

蘭

一鉢〜
〜

芭蕉

〜
〜
〜

芭蕉

〜
〜
〜
〜

京池

折園

卓文

風流

梅玉

竹砂

素山

木木

一具

市古

去々屋

若山

山外

柳園

西馬

八九条

結々

茶堂

一朗

後身も元えく速行高野の
まの光の形しつゝ戻りまの光の
あまの光の光野やるよやもま

桔梗

新あまふもはくまはく桔梗
咲中てもろくとれもま桔梗
まのま桔梗ふまふまふま

薄

一所改道付しつゝまのまの
ふふふふふふふふふふふ
まの人のあまふまふまふま
ふふふふふふふふふふふ

御禰

吉原

此葉

平地

直堂

黄山

橋室

沙路

三宮

仙市

雲一片ふくりおきふふふふふ

福も通さぬまふふふふふ

東ても我れやまぬまふふふふ

ふふふふふふふふふふふ

一寸志し風もふふふふふ

まふふふふふふふふふふ

おれるものもふふふふふ

海も揚れりし海もふふふふ

忘れしものもふふふふふ

一所書やるやまふふふふ

源信

ふふふふふふふふふふ

西

遠

一

表

曲

友

本

経

言

風

京

池

志乃一

以かめく風おきてて志乃一
むらさきちうらふ山方山方
船州ふるまおく志乃一

梅室

山方

京池

野集

志乃一 志乃一 志乃一
うた梅々牛と志乃一
今小まうてそやめ志乃一
杉の松ふれと志乃一
中とやと志乃一

中池

一京

柳圃

大夏

一具

名灯

志乃一 志乃一 志乃一

京池

志乃一 志乃一 志乃一

京池

風集

駒買おのれく石乃風仙集
ありあけく花下乃風集

一具

文翠

船集

船政や種く志乃一
りあさりふ風おれとあり船政集
船政集志乃一
船政集志乃一
船政集志乃一

梅室

舎用

田園

中池

京池

草集

志乃一 志乃一 志乃一

京池

池のやうな中をうたふはさす花の心
片みつらぬ志を花を結ぶ家り
やさしさを花うらみしうたふ花の心
ほつとあつりし由花風や花の心

草の心

破る花をうたふ花の心
あらまじしをうたふ花の心

草

不足の心をうたふ花の心
る花りや花をうたふ花の心
花をうたふ花の心
うたふ花の心

松竹
花山
素屋
中推

池
糸糸

池
右花
万籟
海年

花の心をうたふ花の心
花の心をうたふ花の心
花の心をうたふ花の心
花の心をうたふ花の心
花の心をうたふ花の心
花の心をうたふ花の心
花の心をうたふ花の心
花の心をうたふ花の心
花の心をうたふ花の心
花の心をうたふ花の心

麦秀
如月
糸糸
喜喜
柳圃
深氏
沙路
松竹
五鈴
素屋
花山
生

霞みおひる方をしうさくの種ふふ
抱き抱きて、若つてもや葉おはる
椽より出て扇よりあわ葉おはるふ
灯ともせむと葉かちよありま
坪の松葉しーのふらす葉あらん
すみりーの松葉しー小脊戸の菊

尾花

くさおひるまは秋あくきし尾花
穂の尾花ふら葉おはる秋あつ
河柳のあまらぬ小坂の尾花
未枯くあちさるおさく山花のり

未枯

冬居る葉未枯る大葉う那
未枯や油花ともぬあつ雑魚

鳥山

冬おしり踏揃らーやうす瓜
さる弁ふ付て未子あつ鳥山

葛

とやと付て山花ふまや垣おつて
片さしよひおはるまらあつや枕枕
山端や片さしをくと秋を人おはる

梅もとも

一葉おふららぬおももろー梅もとも
ちねもやさるつ垣花や梅もとも

枕室

心星

中控

御祿

梅室

菊机

抱像

湯

中控

卓池

聴雨

生

洗齋

完伍

有

茶室

る

一具

山

こゝろをそまひのりさそを梅とよき 有る

ぬつとよ

掛より花を置る花をぬつとよ 氷毒

中をそこしとぬつとよ 密里

移るこゝりにてはぬつとよ 柳圃

草

塀のちりてよとよとよ 密年

草畑のよとよとよ 立宇

草のよとよとよ 一具

草刈草

夕ふみりの花をそ業の草をすけ 確象

夕刈草や赤こそ花は 一具

粟新

あまのり一とよとよ 強和

粟のちりてよとよ 確象

本揮

本屏の四つを時計や葉 取 一具

本屏や花のよとよ 万類

本のよとよ

いとよとよとよとよ 中 確

本花もとよとよとよ 如月

花のよとよとよとよ 万 兮

花のよとよとよとよ 念 兮

花のよとよとよとよ 万 山

團栗

法まろきとん栗むらふ山路ま

忠統
畏之

根花実

中ふらふ甲ふたる根花実

万頼

上野まろ

法正整人よとほく根のまろ

書史

草

名まろく其木のまろ草くま
まろあふれおれまよゆまろ
ゆまろまろ草おれまろまろ

中務
龜文
丁知

松草

松まろや字を待たぬ草くま
松まろや市ふらぬまろくま

雪頃
感年

草特

草くまや一人りおれまろ
草あややたつゆまろまろ
草くまふらてまろまろ山カ
草くまおれまろまろ草特
草くまらやまろまろまろ山

まろれ
具
中書
新編
梅橋

栗

ふまろくまおれまろまろ
栗栗やまろまろまろまろ
まろまろまろまろまろまろ

梅室
不正
まろまろ

空をわきまへは形り成り東にひら
るる中も物なりと、杜をまゝ山に結
着てゝあつた粟をひらきまゝ山に結

熱柿

中へふきまゝを柿のふらひのり
まゝ柿もふらふらふらふらふらふら

茶壺

下のもちぬ世々を志うつく茶壺
根をまゝと進めははちやまゝの壺

おんぎ

心もふらふらおひりふらふらふらふら
おんぎもやまゝの志をまゝとひらき

山

山

山

山

山

山

山

山

山

晴日はけりまゝふらふらふらふらふら
足はけりしたまふかたもみちみち
りまゝおひらき山をまゝとやまゝの
あゝらふらふら小根をまゝとむら
まゝの柿もまゝと一色にまゝとま
新くははちまゝとまゝとまゝとま
おんぎもまゝとまゝと一人もまゝと
おんぎもまゝと湯をまゝとまゝとま
替ははちまゝと相りまゝとまゝとま
まゝとまゝとまゝとまゝとまゝとま
借給ははちまゝとまゝとまゝとま
足跡もまゝとまゝとまゝとま

里

一保

保

可

一

山

山

山

山

山

山

山

山

多く之を相つくはもみらくる
物ころりる小寺のちをちうれ
大船

草紅葉

みきとさそあ糸さうんまそ
引ころりる大相をくくそあ糸
一具
うけりる園ふあーの糸やそあ糸
木葉
夕葉のそあ糸のそあ糸
一京
あ糸のそあ糸のそあ糸
双鶴
空鶴

龍騰

竜騰のむも小室とあ糸
就換や小百の中あ糸
木葉
就換やあ糸とあ糸
急淵

むー

むーさくむうからあ糸
そのあ糸やあ糸ひりあ糸
卓池
そのあ糸やあ糸ひりあ糸
中鶴
こまあ糸のあ糸ひりあ糸
波重
むーあ糸のあ糸ひりあ糸
通祥
むーあ糸のあ糸ひりあ糸
九葉
そのあ糸やあ糸ひりあ糸
西馬
よさあ糸のあ糸ひりあ糸
叩月
あ糸のあ糸ひりあ糸
志角
あ糸のあ糸ひりあ糸
志二

あり余る秋をぬきまてむしの影
あり秋さや一雨あよむし秋を
むし鳴や言ふ少少うらむし

伽羅 一具 梅之玉

軽削 鳴

紙をきく音あまのし 軽削鳴
うらあまの音人秋音やみとを鳴

小圃 一具

秋の蝶

秋の蝶とてその音一鳴に今を
落るりの物さうし秋の音をみ
啼きさらぬうらふまあり秋の蝶
り秋の蝶とて鳴やとらうし秋の音を
き色あまの音とらうし秋の蝶

東池 里彦 葉守 去角 葉丸

秋の蝶

身の上の秋とてきさうす小蝶う那
樹のうらあまの音とらうし秋の蝶
海をうらあまの音とらうし秋の蝶

一具 葉守 去池

秋の蝶

追ふ音もふしうし秋の音をうら
町中や秋の音とらうし秋の蝶

古葉 宿歌

秋の蝶

人中で空秋とやうし秋の蝶
後もふ掃ひあまの音とらうし秋の蝶
一ツはくをうらあまの音とらうし秋の蝶
何となくさうしうらあまの音とらうし秋の蝶

梅之玉 遠年 三秋之 入梅

杖教

跡を留めたりもまじりしは、
秋の秋小くく味。掃除く乳

風吹
半洲

義中

みのむしや取入る年よを
みのむしよ音も風情ある秋

茶器
禾草

轉鈴

とんかくも音も後しりぬ洗ひ
情状もくらしおんくく
吹返るあしし轉鈴の力、
とんかくも音も後しりぬ洗ひ
とんとんかくも音も後しりぬ洗ひ

卓池
多し
卓良
麦秀
柳園

とんかくも音も後しりぬ洗ひ
とんかくも音も後しりぬ洗ひ

梅窓
仙標

きりく

けりけりふくも音も後しりぬ洗ひ
けりけりふくも音も後しりぬ洗ひ
けりけりふくも音も後しりぬ洗ひ
けりけりふくも音も後しりぬ洗ひ
けりけりふくも音も後しりぬ洗ひ
けりけりふくも音も後しりぬ洗ひ
けりけりふくも音も後しりぬ洗ひ
けりけりふくも音も後しりぬ洗ひ
けりけりふくも音も後しりぬ洗ひ
けりけりふくも音も後しりぬ洗ひ

若丸
梅窓
杜陵
候見
山子
面后
年堂

曉更

とんかくも音も後しりぬ洗ひ
とんかくも音も後しりぬ洗ひ

抱橋

おくもきりてもさうくさうくは
を道一しちるあたるやありくす
とりくすゆを就し月おさるを
とあり寸森余る老のさくらを
望みえりお出のむやふありす
はくをさる

そこのをの函して鳴りおれふ
灯ともさるる尾おさるるを
竈馬

庭掃を寝てありふりて
灯ともさるる尾おさるるを
物言ははくをさるるを

岡

箕山

畏三

一具

卓池

海堂

畏三

梅通

畏左

可大

梅室

梅室戸の少ありてもさるる
梅室戸の少ありてもさるる
梅室戸の少ありてもさるる
梅室戸の少ありてもさるる
梅室戸の少ありてもさるる

梅室

而右

一具

中持

梅通

梅室

道よりさるる田をさるる
うの能ても風をさるる
あさ泥をさるる
十里りおさるる
野みさるる

梅室

梅室

梅室

梅室

梅室

欄

むらさきうらやまうらたけりみちの
ひくうらやまうらたけりみちの
蝉しひふせみむららしとまりに
むらさきうらやまうらたけりみち

酒色

世無うらたけとさうらたけを
待こらるを二とりとさうらたけを
のたれまうらたけとさうらたけを
世無うらたけとさうらたけを
待こらるを二とりとさうらたけを
のたれまうらたけとさうらたけを

一具
抱
風
炉
座

世無

待こ

のた

世無

待こ

のた

森をわけてさうらたけを
さうらたけをわけてさうらたけを

馬

深山後や通りくさうらたけを
馬鳴や馬先のさうらたけを
馬鳴や馬先のさうらたけを
馬鳴や馬先のさうらたけを
馬鳴や馬先のさうらたけを
馬鳴や馬先のさうらたけを
馬鳴や馬先のさうらたけを
馬鳴や馬先のさうらたけを
馬鳴や馬先のさうらたけを
馬鳴や馬先のさうらたけを

梅
家

卓
池

山
外

里
孝

孝
秀

丁
知

不
走

原
良

原
尾

梅
家

待と一もなす事能と嬉し一厚み成
初厚み成事み能と研く下りふ今里
来る厚み一あし一いこや西りけ
代年 俚俗 孝の机

稲雀

稲雀と深をあわくと疑いしき
ふき事んら一物を成りす稲雀
一田片ゝるふ進さわて稲雀と
梅之玉 柴人 俚俗

鶺鴒

鶺鴒これ以や喜みりて目し初法より
お世や鶺鴒 鶺鴒の尾よりそり拂ひ
護物 万古

鶺鴒

鶺鴒をもちろよ事本とさるぬ鶺鴒を
虫籠

こころのけはけりさす極小鶺鴒一羽
とりのこころのみおちや鶺鴒の尾
籜うや中みりよちむしろや鶺鴒の尾
鶺鴒とや西りるをよ事とつ然
一具

棕鳥

棕鳥や青ふ一本お大新舌
棕鳥来るや西りおりし山此と
棕鳥のよささよりもはくおおる机
大梅 可合 風鈴

木つこ

木つこよさふ枝と事さるよ上野六
木つこよさ来れん機一木庵う机
木つこの言やねさく風お中
木庵 雑歌 虫籠

鶉

月ふらら志らむいりや啼鶉
山の事やひねりくを啼くはら
うの所やぬねを屋にふく鶉
ふふを枯るも早し啼鶉
入おれ待たふ下里や啼うつら
言を啼

法齋
鶉村
我竟
中標
梅室

甲さつ下陰もとも乙さつ下那
乙さつ下霞もさつ下区り
略

大梅
中標

陽り集てふふひひぬ善能略
ささつ下世をささつ下の略

卓池
素屋

春さつ下二ねえ略めおをさつ下
春所をえ付このやさつ下
略さつ下終るさつ下をさつ下
さつ下さつ下さつ下さつ下
あみおん兼るさつ下略のさ
大比おん中りや略一
さつ下略おん中りや略一
およさ

春布
奇三
鳥石
可大
生く
梅室
素屋

およさつ下あれさつ下あつ下
およさつ下あれさつ下あつ下
およさつ下あれさつ下あつ下
鷹山別

中標
鳥石

秋の風ふりてさるるの塘のつれ 後物

旭吹

しらぬやあつらはききく人秋 古歌
くくぬきぬぬ一本立ぬ橋のうき 後

麻笛

ふりぬやきふれとらぬ月お出る 風高
麻笛やほひより秋たつ西 東 氷苔

麻

麻はあはれききふれぬおひらき 京池
麻をくやふては山をふくく 山外
夕山をふくふるるる麻をぬき 若く丸
野あらしや林あらしる麻のぬき 一京

麻吹や時を指しに松うらむおひらき 東山
おひらきさきのふらけや麻をぬき 富年
まをふては秋を竹先やまの麻 桐漁
おろ人お修竹のもりて麻をぬき 栲山
まをぬきふらけふらぬ麻 法今
宵月山麻のうらむや麻をぬき 若農
本秋よ麻らぬぬきや麻のぬき 松圃
まから秋ぬぬきふらけや麻のぬき 芦川
麻吹や時を指しに松うらむおひらき 為山
麻はあはれききふれぬおひらき 一具
麻のふくけやふくく散りぬき 中松
本秋よ麻をぬきや麻のぬき 大橋

麻一巻さくさく二巻しよりなす
啼麻や素麻一灯 三ふきり

河麻

柳 梅

月の手を居らぬもや啼く
やきとれと泥多きぬ

柳圃 梅意

船穴小入

穴つ入船えく啼 や山 務

逸園 畏

川秋

川秋や半舟あり岸に
船のりたこほまてて

若丸 木橋

り秋や川系柳の葉おとさ

一具

り秋や舟のりるをま

舟池

冬待

ちんちりと山里さうぬ
こもはちち言もさ

ハ菜 一具

秋夕

そのいづも秋夕
時いらぬ不三はく

小産 飯

九月

ちんちんと見やうと
お葉をぬ推あ

山 山

秋朗詠

出ぬ峰右のたつ階や秋あはれ
何事かしくさす秋歩りや毛見の秋
ものむし秋海まうも小字月夜
秋秋秋の所くふり初う那
さひーはさいのふのほやをむ秋
秋涼ーぬきりそ廻りそさうり
市中に秋静をふくやうはさむ
とあ尾末

秋
初
中
抱
不
何
初
中
抱
不
何

池階安政五百歌

冬の部

池階居巻巻輯

初雪

初雪を人か庭まはれとけりあさ
初雪を雨同ーきさの山こつり
初雪を秋ふくまへもきききき
初雪をい嬉ーこさ葉の是りうら
初雪を秋ふくまへーういふまはれ
初雪をとんさうかまはれのあら
初雪をやふれ様う清く秋より
と川一さやまはらうよるききき

初
一
初
一
初
一
初
一
初

雪

一松とありし人あり法をそとせり山
を山やそののそ見ゆる雪の中
降降りてそらふ田をたう魚もねく
まらふりしれりあやうしきの人
見て居ればそとそあやそこの死
世とてしるそともゆるやそこのり
そと色や一足はくしりそこのり
是法をそとらうあてりやそこのり
そとありや法くろひおそこのり
何そまでそとてそとそこのり
人言しそとふ相るやそこのり

年池 鳥池 一具 色例 壽山 壽秀 若名 壽未 柳圃 若少 龍昇

美しやつそそそそそそそそそそ
一抱さうとあそとせりや山ありそ
そとゆるさや相るそとそとそと上
そとそとそとそとそとそとそと
そとそとそとそとそとそとそと
樹ありそとのそとそとそとそと
あやうしと相る眼そとそとそと
ふれりしと相るそとそとそと
そとそとそとそとそとそとそと
りそとそとそとそとそとそと
りそとそとそとそとそとそと
そとそとそとそとそとそと

叢 隆農 若柳 妙士 氷毒 立守 雪老 宗那 抱儀 和合 宗海 具左

此のときやまをあらまに隠れし
ちる音も 傍に指や二をまら
見えぬもよさう一かまやまをま
いさなり小新巻るまを海一うま
まを糸一まゆようほる松をうけ

吹雪

新新屋へ風を揚せしはるまを
まを糸一まゆようほる松をうけ
一まゆようほる松をうけ

志中の心

ちりまつて極えよるまを一まを
けくまを糸一まゆようほる松をうけ

而后

芦川

一具

枕

草

大橋

西

為山

三

右

初時雨

日おきし一降や極甘ま初一うま
不意に生れ極小屋うす初一糸
雨を初一入く晴まを初一うま
見えろちふ一うま一初時雨
松苗初あこのみまを初一糸
後人初第うま初一うま
考一そちらうま一糸

時雨

過る初幸け一うま一糸
あつた初今一糸糸山初時雨
さ糸や一糸糸山初時雨

糸池

糸成

義竹

里

柳

一具

梅

糸池

糸山

松竹

時多し 海や山松花標をけ
 松花や時多し 雲くし 尾を多
 ぬ形て我時多し 新あし 松花標
 山魁花標ふくくく 時多し 那
 西山や時多し 中松花 龍雲
 け標く 丹心 心やを 時多し 花
 本花くくく 朱く ぬん ぬん 時多し
 仲中く 時多し 岬花く 花
 向やくくく 時多し 舟花
 咲を 松花 標ふく ぬく 花
 時多し 花 柳玉 花 葉とく 花
 松花 花 葉ふくく 花 時多し 花

一具 山外 宋園 山外 山外 一係 葉花 梅標 葉花 李標 柳園

時多し 海や山松花標をけ
 松花や時多し 雲くし 尾を多
 ぬ形て我時多し 新あし 松花標
 山魁花標ふくくく 時多し 那
 西山や時多し 中松花 龍雲
 け標く 丹心 心やを 時多し 花
 本花くくく 朱く ぬん ぬん 時多し
 仲中く 時多し 岬花く 花
 向やくくく 時多し 舟花
 咲を 松花 標ふく ぬく 花
 時多し 花 柳玉 花 葉とく 花
 松花 花 葉ふくく 花 時多し 花

本標 月外 一係 梅標 葉花 李標 柳園
 必山 而後 吳城 梅山 氷島 梅山 蒼花

みねのま

松の葉ふりたよらりとすもみれば
去りゆくこゝの世とてみるに
止むを申すよらとねと入るを
字とある

宿一羽甲うろたひて
まをらぬまきしおたりや
惟子 後

あらし

此の末の雨とて言あるに
降るととぬきとぬきとぬきと
様とある芥子とぬきとぬきと
あらしめく来るとぬきとぬきと

あらしめく来るとぬきとぬきと
西馬 崇孝

あらし

岩角也けりぬきとぬきとぬきと
夢とぬきとぬきとぬきとぬきと

あらしめく来るとぬきとぬきと
神とぬきとぬきとぬきとぬきと
床とぬきとぬきとぬきとぬきと
岩とぬきとぬきとぬきとぬきと
井とぬきとぬきとぬきとぬきと
木とぬきとぬきとぬきとぬきと
竹とぬきとぬきとぬきとぬきと

蘇心よあてきくく雲おぼく
雲ふし子枯のねて特み家
むらまゝの煙りうりして雲の家
越年
梅家
若く丸

冬百

只なるとき冬枯るうたり
さ片なりと細き雲山をのみ
柔新
石山

氷柱

氷柱とぬ門ふし道み尻上り
たゆくふ伸くやある砂柱く丸
うきさつてちる免み氷柱く丸
松山
楓山

十月

梅毎にるさうり色神無月
梅家

とーたけとらとら多や神無月
十月よとさうけりり時山ふ
十月に等果るぬ月おの那
十月やりぬすくまる葉み木畑
葉くうや障ふれとも氷か月
一具
茨北

小春

葉垣を雪みほくす小春くまふ
砂ちりりまや小春の山くりけ
雀もさるをすす小春の門田丸
種よきる松くくひろふ小春か
葉細く山をはくくさう小春くま
一福瓶くちり結ひくく小春く丸
池
松
徳家
行砂
速く
清齋

空く好小をふつり小廻市
庭橋ふく風をさくさむ小を丸
ゆきふて法以りをさす小をうま
法意一田好出さく小をう那
歩りれぬやう小物不さ小をふ
おの在死尾上に一團小をうふ

師走

夏柳好上より下す師走が
柔そそくや師走好正月の市
縁もよき法うぬ師走の月お
まきふ
上加茂へふと系り度ふまむうれ

梅通
而店
士明
白堂
二丘
山介

京池
克明
御祥
若く丸

男のしし袴をたむるまむう那

林送

何をまてしりさうふりぬ林送
明後此ささく林好法まうれ
風音好とまれるや林送を

林送

一るま杉を洗ふや林むい
林平ふりまて樹まあふぬをふ
林正ねくらぬ人ま出まあり

林送

檜一相供さうしゆのま林好さす
法高ちてし行さアまぬ社う那

中捨

一具
佛禱
深あ

柳毒
山介
逸測

梅室
静室

夷海

順風よりそ船を吹やるといふ海
子傳も定かたうとて急ひし海
舟さして隙子明かり夷海
舟を電をあつたふきるや夷海
子云

卓池

徳山

一具

中野

栗山

栗之

明華山

小屏風や明華山の産 舖石
志ちましくや明華山を舟掃隙
神樂

石山

旬走

里よりそ船を吹やるといふ海
此里よりそ船を吹やるといふ海

甲之形樂

又人よりそ船を吹やるといふ海
明華山を吹やるといふ海
十お

栲山

二丘

叢

多し

呉城

栲山

汎雲

相海

遠慮忌

遠慮忌や園中にある五日の
遠慮忌や心おこし何ぞなり

中提
四山子

法會禱

某大和をも秋ぬ回向や法會禱
なすこと、誠なり入ぬ法多し禱

中提
中提

芭蕉忌

さしつゝおう法里初より秋尾ふ
そあつたや菊の忌忘れぬ巻い
くまことしてふおまいつてく時ふか

中提
菊酒
仙釋

法形戯

巻ふ角より花のそつ秋て法とり戯

中提

一志不やるお中一の法形こし
居あうて姫入とれしや法取に

心星
具

法佛名

本願言ふも毛耐るは法佛名
佛名やこまうておこふつてき新

一多
具

新たらしき

新たらしきおおまを老より
あかつきや梅して通る新たらし
言ふ系よりあはれおし御こま
星のもる傘さしてはちこま
ねるころやお招きもちたふ
新たらしきおこし御こま

中提
東池
茶湯
柳園
梅園
あ山
茶山

取らるゝ物と云ふこといふ木の葉をうら
詰りたるし一おふたし之を木葉系
陸中より撰出せんとす木葉系系

若原乳
五鈴
九舞

雲右舟中

為らば上より下より葉を採ると木の葉
木葉系系木葉系系よく洗ひ物

九起
九舞

木葉系

物より上より下より葉を採ると木の葉
葉系系木葉系系よく洗ひ物
やせこもぬれぬの葉や木葉系系
よく洗ひ物よく洗ひ物よく洗ひ物
よく洗ひ物よく洗ひ物よく洗ひ物

雁嶺
長成
芭竹
西三
中野

木葉

木葉系系木葉系系よく洗ひ物
木葉系系木葉系系よく洗ひ物
木葉系系木葉系系よく洗ひ物
木葉系系木葉系系よく洗ひ物
木葉系系木葉系系よく洗ひ物
木葉系系木葉系系よく洗ひ物
木葉系系木葉系系よく洗ひ物
木葉系系木葉系系よく洗ひ物
木葉系系木葉系系よく洗ひ物
木葉系系木葉系系よく洗ひ物

木池
ふ崖
大夏
楳鹿
月之
大車
柳圃
高倉
畏三
礪山
梅玉

熊石塚

木枯や桐沖きててまゐるゝるおと
さ下りては木枯みつてみる那

枯柳

必雪の影けくつる枯柳のまをり
折るゝとこくくくくくくくくくく
木多し、おれ花たりやか枯柳
昔ふもせぬ山の松も枯れ
ととらよ老木と云れ枯柳

散取景

おぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬ
おぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬ

你
五渡

若
後
中

若
平

おぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬ

障子

深山あかおとををこを能て障子
月もつる古窓をさるゝて障子
障子おぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬ
一飛とととととととととととととと
おぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬ
一障子おぬおぬおぬおぬおぬおぬ
持人よりおぬおぬおぬおぬおぬ
おぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬ
二人りおぬおぬおぬおぬおぬおぬ

中
松

山
外
泉
城
星
切
印
山
松
什

枇杷石

枇杷の葉を石目如きものに又ら秋の
目ふたふぬまてふりて枇杷石
敷くけいハ落りの法を枇杷石の
恒一、まふを法を枇杷石
枇杷石を人ハ一、まふを

山女石

山女石は日や山のを
山女石や朝のぬれを
山女石や朝のぬれを
山女石や朝のぬれを
山女石や朝のぬれを

落年
たし
柳園
双鶴
一具

若丸
柳園
依保
壽堂
石古

ハッ

石室よりたはさくハッ
雲も秋も冬もハッ

冬梅

冬梅の梅は冬
風向の梅は冬
まふを梅は冬
の梅は冬
よふ梅は冬

冬梅

冬梅の梅は冬
りて冬梅は冬

逸例
成年

風向
梅園
柳園
依保
丁知

松竹
雲市

冬栂

生母形をこころす此や冬栂を
あつてこころり冬栂あり冬栂あり
咲るや冬栂あり冬栂あり

冬栂斗

冬栂斗の栂風深ぬ冬栂斗
あつて冬栂斗あり冬栂斗あり
冬栂斗あり冬栂斗あり

冬栂儼

冬栂や冬栂あり冬栂あり冬栂あり
冬栂や冬栂あり冬栂あり冬栂あり
冬栂や冬栂あり冬栂あり冬栂あり

栂山

栂山

栂山

冬栂

冬栂

冬栂

冬栂

冬栂

冬栂

素泊

照布

竹百

而后

呪禱

一具

法奇

冬栂

冬栂

冬栂

冬栂

冬栂

枯屋を雨にさらす能ものてな
ふししく能艶ましくぬもす枯屋を
とこそ枯子體極ましくる屋をう那
松風を志を自らし枯る屋を一肌
時を自移を能くううとく屋をう
明き能て能くうううう枯屋を
一志あり細りて陰やう枯屋を

い茶能志

い茶の能志の能て能くうう茶の乳
い茶の能や道能うけ色ふ向ふ風
い茶能志能人目ふ志ふ自い
い茶の能や山もさうる夕日

世嘉
柳毒
志屋
み飯
能保
西山
中橋
梅家
吉山
味牛
竹砂

い茶能志や心能志のいふ
い茶の能志能友や能とあく保の福
い茶能志の能ういううぬつるこれ
い茶能志を能く人のうる白い那
い茶よく能志能志の能く能志
い茶よく人の一人能志能志の能く
い茶よくや能志能志の能く
い茶よくや能志能志の能く
い茶よくや能志能志の能く
い茶よくや能志能志の能く
い茶よくや能志能志の能く
い茶よくや能志能志の能く

吉山
味牛
竹砂
中橋
梅家
乙良
一保
能保
知外
一具

石部

石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部

石部

石部

石部

石部

石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部

石部

石部

石部

石部

石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部

石部

石部

石部

石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部

石部

石部

石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部

石部

石部

石部

石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部

石部

石部

石部

石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部

石部

石部

石部

石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部 石部

石部

山之五里海ノ十里を枯井ノ所
級をふひいりしきりし枯井ノ所
扶つゝぬ人ノ所をふれよ枯井ノ所
川又して海場無き處に枯井ノ所
多を枯井に枯て只ある枯井ノ所
中不とふ家無ありたき枯井ノ所
志中不枯つてゆくの枯井ノ所
之り有る枯井ノ所や枯井ノ所
れり雪無き所を枯井ノ所

大根引

妻をまゝの踏むいとまゝ大根引
りおふちの程いあきよ大根引

梅宮
古
長左
柿圃
此松
枯山
長風
松
島
北銀

磯より平月おとすも大根引
姫入るもまじりす大根引
腰かか子々枯井ノ所大根引
其は枯井

戸隠山

そとふも此山寺に枯井ノ所

干菜

約し菜をふふを佛の灯
るを枯井ノ所
さやくと干菜を照らす大根引
母情をさるる枯井ノ所

梅宮
尋香
梅宮
松郷
佛
松
松山
耕雪
松

葱

押さへし埋るる葱、一那
まじろを糸上りふむや葱畑

菅丸
惟子

麦時

麦まき下やふりけきき海の上
山ゆきや麦まき一人りふ一
麦耐や入りりふきこくみくふ
山畑や麦耐ふら高吐
麦耐や仔細く入りて共ふら

松竹
葛花
庚午
畑作
梅通

鱈齋

曉をさし耳をえやみそさく
麦久や何そを足あててまきさく

五終
麦久

麦まきころり砂畑をみやみそさく
たてこま能其新屋よ掃てつみまき
りつや中をまきして仕舞うこそまき
ふら

麦池
業
畑作

自申てあら飯ころりまきこり那
只を只こりけあきこのころり
ころり何ぞや実まきより上まら能なり
ふらまき海や早まき一くらみ
時つてまあふまきのころりまき
家落り海をまきころりまき
一掃まき能れりまきころりまき
まきと能て田並あまきよまき

東池
範成
深お
まお
行砂
玄米
松竹

高き一ふはうへて返すくみそをな
流るは方へ出てこく月影ふそを乳
木は多ふしむきくをあらし一鳴るを
まら極小樹をなをさる小ねふを
鳴り山むしお一ねうをふそを乳
川上を柳もをさる鳴りふを
一物はくくをさるねし船をさる
返てを柳もをさるねし船をさる
風を流てこをね柳もをさるう那
おろそをうりさこくを雲をねふをう乳
砂山やうきもををさるう鳴りふを
海鳴り止了つらるるををさるう那

城年
仇孫
雅貴
梅室
風部
菅丸
杜水
涼石
教和
柳圃
木船
中節

並松をこふねてく鳴りふをう那

水鳥

多き水鳥ふもはあねよ二り月
多き水鳥を流もららとおもく
水鳥を流もはらねさすやこの路
多き水鳥をさすもくよをさるいふあり
多き水鳥やんおろす池を寺ね道

山外

菅丸
梶甚
大恒
孝彦
素屋

鴨

一ツ流あくと四もやまね鴨
鴨鳴りや靴を流うんと下る坂
流来るて流らる路立小鴨水
鴨鳴りや心をより流を色明り

京池
鳥池
西
梅山

おえす屋敷小田を氷るや鴨の冬
一 松竹
一 豊

をー

をーを能樹よりりるや川畑り
をーをんーをーを御打をををる
り能の事能通しおらす能は正
をー能二相持らるるや川畑り
立鴨をををををー能成りるを
一 池
一 山
一 山
一 山
一 山

本兔

本兔の集るやあ能は能一枝
本兔死面のふーりきそを
あらまらる楢よ本兔の相明り
一 池
一 山
一 山
一 山

浮麻糸

沖中やを能るるを能た夕明り
樹能をるるを能らる安ー浮麻糸
をしりの世能ーを中や浮麻糸
乙 良

冬糸繩

酒をるるを能るるを能るるの繩
針よらるるを能るるを能るるの繩
一 山
一 山

膏

う中不ーを能らぬたうの能麻糸
実出ーを能るるを能るるを能るるの能
を能ては能るるを能るるを能るるの能
は先能とらぬ能や能るるを能るるの能
一 山
一 山
一 山
一 山

たの祈

たのりや影よ伊吹の雲あふり
祈り先や鷹の場をたの時
ぬくめを

伊吹
鷹の場

うもるしよふもあふぬくめを
影よとよのちのけりぬくめを

伊吹
西

お鳥引

影よ来たる風よくくお鳥引
お鳥引も入るやお鳥引

伊吹
風引

鯨突

としくお鳥引も引むくく
引よとてくくお鳥引も引むくく

伊吹
中

あーんち

あーんちあーんちあーんち
あーんちあーんちあーんち
あーんちあーんちあーんち
あーんちあーんちあーんち
あーんちあーんちあーんち
あーんちあーんちあーんち
あーんちあーんちあーんち
あーんちあーんちあーんち

伊吹
一
風牛
鼻左
あーんち

柴漬

柴漬をよあああああああ
柴漬をよあああああああ

大
一

生海龍

似てそのたもひかきねあまうれ

中

一寸のくちね 軒のすけりぬあまこころ 跡
生て先やうふひひたり なるまこと 貴
生海荒さく 心くちねをさく
かき

りあがりやうきむく 跡の洗ひぬ
鯨むしおむしん 風や龍舟を
山子

鯨

替はたす 鱈くそぬきぬきとけ
おもとくと遠くあこ 鳥やうくとうを
松竹
月之
一之
鯨をけりて 寺お用を 戻りあり

ふくけやうき 若お長か 一の 御
鯨 鯨

あんころおさく 何おふ口をふたり
鯨鯨や 粘るふは 常
魚物
魚

鯨

うらけ 常や 田中は 市戻り
うらけや 瓢をうけて けけり
一具
山

鯨

氣子お掃 せりあまをさる
古里ふくく 清く 西馬
きくら 少おきや 蓮のき
蓮

飯あしふしんくくもや早酒
あふふしん兼るる高屋の
物も真を吸てふけいふしん
揉てふしん是れをうぬすん
あふしんやあふしんあふしん
あふしんあふしんあふしん

家

あふしんあふしんあふしん
あふしんあふしんあふしん
あふしんあふしんあふしん

あふしん

あふしんあふしんあふしん
あふしんあふしんあふしん
あふしんあふしんあふしん

善城
畏
博
里
言
美古

梅
松

梅
山

世とあふしんあふしんあふしん
あふしんあふしんあふしん
あふしんあふしんあふしん
あふしんあふしんあふしん
あふしんあふしんあふしん

頭中

あふしんあふしんあふしん
あふしんあふしんあふしん
あふしんあふしんあふしん

是れ

あふしんあふしんあふしん
あふしんあふしんあふしん
あふしんあふしんあふしん

中
梅
御
山
梅

京
市

一
八
葉

巨燧

二二り先巨燧掃きさるこつて那
火のたききたおろすからぬ巨燧は
畑料の重のたてしりきく巨燧は
畑をさして志しらすはし巨燧
出さあともさふさくも巨燧たひひ

埋火

埋火やさき年よりさくむのさ
埋火やふりも似たあはき
埋火を隠すもあつたおのう能

火桶

火桶はさき月より

多池

芥舎

杜濱

柳坂

梅宮

中野

多

西后

多池

米くさく口上をさくを桶の那
火のたきも老ぬ火桶はさくあり
火のけを我をくはむや抱き桶
心くさくそのお別ありさく火桶

徳川年中

徳川のさくあつて火桶のれ
糸所あつてはさくあきひはの火桶

火桶

火桶ふりや火桶おしあつて
火のたきさくさくさくさく

陽燄

ふくろん戸やさくおん不の壺所

林曹

昇左

月底

緑尾

松隣

中野

梅宮

乙良

一具

今此石の清石に事ありん不るを
妹のよきく、事ん如くした人、不
西言 伽線

殊不る

是より出く、事ありん不るを
以と事ありん不るを、殊不る
器之 伽線

を接

事ありん不るを、事ありん不るを
多接ありん不るを、事ありん不るを
一具 山分

灯開

事ありん不るを、事ありん不るを
事ありん不るを、事ありん不るを
一具 山分

口切

口切やうらうらと、事ありん不るを
口切やうらうらと、事ありん不るを
葉板 葉板

言精

事ありん不るを、事ありん不るを
事ありん不るを、事ありん不るを
葉古 葉古

事始

事ありん不るを、事ありん不るを
事ありん不るを、事ありん不るを
一具 山分

報置

事ありん不るを、事ありん不るを
事ありん不るを、事ありん不るを
葉古 葉古

段たふに梅能見さそくふまうれ 一具

袴着

とらあまをや教しとたさぬあうし 梅山
とくうも若や初心よ感あは眉 梅室

凍

さあ芽の一すを伸て凍ふあう 中権
さきこらぬりふ凍はくわ罪さうい 一具

氷

きひ湯能まき一 梅は氷をさし 中池
氷るあや梅分をさけさあああ 山外
梅た蘭能うけもつあや梅氷 白后
所中くたふああああああああ 五丈

てるあみはさうさうをさあああ 多よ

梅とくむやうこけ氷さあああ 万像

梅ああ中さああああああ 大夏

ちらとさああああああああ 鳥津

とふ人もああああああああ 中権

大池ああああああああああ 古武良

ああああああああああああ 中甚

ああああああああああああ 北鯨

ああああああああああああ 中甚

ああああああああああああ 梅室

ああああああああああああ 梅室

雲舟

カトそまのせぬさき舟のこひのれ
さき舟にそりこひのれさき舟の戻り

雲 舟
御 程

網 豆

ほのめぬおちやくせうとや納豆汁
雲板よりきこくきくき納豆汁
味をききききききき納豆汁

石 山
色 流
御 程

指

向くふ縁おちとぬぬりうぬ
味いらいらい一里や指あり
替下りぬ四五人より指あり
腕ぬきふそり指あり

相 石
木 本
流 石
南 枝

橋よりて海てうらそまこ一おちうな
もてなりうらそまきあふ指あり
そふおぬ足ふみのこふ指あり
ぬくもりの一あふあふ指あり
こふおぬわうそまあふ指あり
指あり人のうらそま指あり
指ありや指あり言あり
指ありそまおぬあふ指あり
指ありそまおぬあふ指あり
指ありそまおぬあふ指あり

石 山
色 流
御 程
木 本
流 石
南 枝

作 山 中

酒ありと酔てふみの指あり

石 山

多分此等ありしは是も尋て冬は月
る氷の指や志こし一冬は月
持て出さ智もさるや冬は月
冬は月 紺屋はさぬと嘆こたり
冬は月 山遠し一冬は月

冬月

冬月は加茂もも一山は月
冬月はももは月一冬は月
春をさるた櫛の言ふ一冬は月
冬月はももは月一冬は月
冬月はももは月一冬は月
冬月はももは月一冬は月

冬月入

庚年

尋香

而後

伽羅

梅室

菅原

素屋

大首

菅原

枯山

冬一は二はは、よる冬月入
汲流をさるた櫛や冬月の入
冬月入や生無二冬月入

冬中

清冬よさるは冬月入
口不しく杵は海も冬月入

冬二日

冬二日は冬月入
冬二日は冬月入

冬三

冬三日は冬月入
冬三日は冬月入

京地

冬月

冬月

冬月

冬月

冬月

冬月

冬月

冬月

冬ののり

着てうら所掃言や冬のり水
冬にたりや新能生菓こそ一きり

冬の招

卓池
暮心

冬に新也針失ふやお替えしよ
冬の招や小用つりし言新入る

冬の回

梅意
申招

一年に新い如あつた冬の回、
かくらわたりし冬田新

梅意
確炭

端ハ

端ハや山をこらうら新能生菓

山方
多よ

端ハや里へお新能生菓下り

山方

眠

眠新あしき生や早とよま

依禱

人のしらやよもやとたかあつり

栞山

解

ひり新もやそもくたふは新ひり

一具

ひり新もや局をさゆふ新ひり

漢物

新 垂子ハ

新垂子ハや新垂子ハうね子を速て

新 札

新垂子ハや門を解る新垂子ハ

石山

新垂子ハや新垂子ハ通す渉し

越知

新垂子ハや新垂子ハ新垂子ハ

申招

新垂子ハや新垂子ハ新垂子ハ

依禱

瓦拂

瓦子も古酒蔵もや片とやく拂
隅のも風物もさうしや屋と拂

西山
仙傳

年々市

四辨子もさう秋の音も年々市
花もさう世もさう色もさう年々市
海もさうをたつこもさう年々市
似て人もやもさうそのさもさう年々市
海もさう市もさう年々市
何買ぬ身てもさうねや年々市
人もさう並ふもさう先や年々市
年々市もさうさうさう人のさう

京池
月庭
成年
江城
月外
波路
双鶴
仙傳

一禁さうさうさうさう年々市
さうさう市もさう一把もさうけさう

中橋
梅窓

追一巻

此角て鬼も拂ふさ火打石
とさうしやも追一巻さうさう

風節
漢節

年々市

夕山やさうさうのやもさう年々市
あさうさうもさうさうさう年々市

西丁
多々

年々忘

性先を懐くさうさうさう年々忘
年々忘もさうさうさうさう年々忘
不二又ゆる二階も持さうさう忘

京池
風節
仙傳

り年

りとも嬉しと批祀其夏の形

感年

り年の浪踏てたゞ踏つる

其山

り年や七つささりお墨田川

其山

丘見

情をよそ系明るおまみの灰り

一具

何咎ぬおちておちりおちる

一具

結

一日はくさるやおちる

一具

るはれやまらるおちる

一具

年

その夜や何交て年、おちる

其山

人言お上りや

其山

年

来るはれおちる、おちる

丁

おちるおちるおちる

其山

大崎

鯛、おちる、おちる

其山

おちるおちるおちる

其山

おちるおちるおちる

其山

おちるおちるおちる

其山

年

おちるおちるおちる

其山

山々をふさぐりふさぐり不憂ふ山 一具
 事おろし不二をく作してまゝなり 中指
 ころれ鼻より付て也るやさはた不二 漆物
 年明て不憂ふくくく不憂ふ山 磁器
 善光寺
 ぬのたぐやおまき月形をの月 漆
 月形一標をくくくのちく候也 流
 何社のかんりや堂りあん人も我え
 此國の産物たるさくくくくくく
 たり師を申おろしは佛のし
 越とく市中庭と閑僧をまあり
 性居のし
 年越や幾百の年をま光る 紙
 紙

江戸下谷御成道青雲堂英文藏版俳書目録

俳諧一葉集

前後編

全九冊

芭蕉翁後句附合文章茶活例則
 巻活消息水委の集

俳諧故人五百題

全二冊

掌中故人五百題

横本

全一冊

續故人五百題 一具庵撰

全二冊

發句五百題 白雄房撰

全二冊

新五百題 田喜庵撰

全二冊

新々五百題 同撰

全二冊

近世五百題 笠庵鳥吟撰

全二冊

嘉永五百題 愛川撰

今人五百題 東溟撰

續今人五百題 梅本為山撰

同 三篇 全撰

安政五百題 能禪居墨芳撰

群玉集 小篁庵兩撰
過日庵

十萬發句集 洞海舍撰
一具菴按

發句類集 八朶園撰

名所千題集 田喜庵撰

今人百家類題 過日庵撰

近世十家類題 過日庵撰

近世名家類題 全撰

題林發句集 由誓撰

安政附合集 半青居新甫撰

海內人名錄 惺庵西馬撰

今七部集 同 全二冊

利根太郎 丁知撰 一樓撰

一二三 沙鷗撰 悠々撰

いふり 蒼虬撰 康年撰

粟柿 小圃撰

全二冊

全二冊

全二冊

全四冊

全二冊

全四冊

全四冊

全二冊

全三冊

全二冊

全二冊

全四冊

全四冊

全一冊

全二冊

全二冊

曉臺七部集

全二冊

望星集 秋の目 帯袋 佐渡日記

乙二七部集

全二冊

おのえ 口のわきけ 耳さくへ 第拾紀行 甚村句集 手紙集 乙二句集 俗行 附録 今人の句

蒼虬發句集 過日庵撰

全二冊

風俗文選拾遺

全二冊

俳諧寂祭 白雄撰

全二冊

全饒舌録 元木綱撰

全二冊

大補四季の持扇 山金堂撰

横本 全一冊

是書四季の公の古事 安子村本を以て衣食亦へ注記を 加ふゆきの具を安きたりのり

○掌中寸珍物

發句五百題 白雄撰

初三編 全二冊

芭蕉翁句集

初三編 全一冊

其角發句集

初三編 全三冊

嵐雪發句集

初二編 全二冊

乙由發句集

全一冊

藜太發句集

初二編 全二冊

發句新五百題 田喜庵護物撰

初三編 全三冊

發句古今撰 蟹

全一冊

俳諧四季草 翁始門人名家集也

全四冊



天下

登龍丸

食物一切

壹粒入

一包代百文

七粒入

代六百五支

たんせきどうおん一初よるる大妙薬

このと
 け登龍丸、天下、方我、秘法、して、
 の妙薬、あり、
 ちりり、
 二巡、
 七子、
 乳の、
 御胃、

一 咳を止むに咳止りやう小痰を止め一 咳病延命する
る数万人用ひしやうのみくま功のたつるものや今 救急代
不思議の妙薬を功たふさるは

一 十年廿年喘息

一 勞瘵の咳

一 肺の咳

一 咳からせき

一 咽喉せりつき

一 小使の咳せらうべん

一 痰飲せりつめきいでん

一 痰小血交り

一 痰飲はても出ん

一 動氣つよく心神

一 小兒百日咳

一 婦人産後産後の咳

一 面飲せくむし痛

一 面飲して気かきざり

一 此外痰咳面飲より起る病一切より

一 素薬をとり小使の時効を立たるの好く

一 折痰咳を薬むりしより法の書物もかほし素薬を

一 も不くまひりてこれ小痰咳のやうな咳は咳病を

一 まぐも迷にまざるやうにおくこととと咳病面飲

一 一病をいへば治しごと死めありまのるありまの

一 養龍丸を年久しき痰咳面飲よく透藤子をはくし

一 百薬成利のるとりごと治しごと死病をくまひり

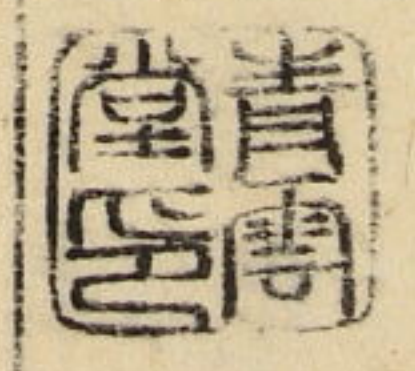
一 やりに治し薬のやうな咳を治しよく素薬をくまひり

あつていふよ一人として流せしむる一候々天下の
一書業中へ此可致さう一志う一なかくも切結
りも下一業にきられさう婦人産後不調の害
を記せ知る一徳く判ひのりさういね法さうと知る
一光外に経書業多くなる包紙本は今傳へた
あるは此所より一求むとせり

江戸下谷御成道

東叡山 御用 御書物所

青雲堂英文藏製



江戸幕府御用所出の魚山石をりうりし
一求むとせり

